

仕事のすすめ

丸野 史郎（岡山県職OB）

釣りは仕事、仕事は趣味と冗談半分で私の周りの人に言ってきたが、最近、医学系の雑誌を読んでいると、村上龍の「無趣味のすすめ」という小文の紹介が目にとまった。早速本屋で買い求め読んでみると、基本的に趣味は不慣れな環境や他者と遭遇することを避ける傾向のある既得権益をもった老人のものであり、好きで好きで何かに没頭する子供や若者を指しているわけではないらしい。趣味の世界には自分を脅かすものがない代わりに、人生を揺るがすような出会いも発見もない。真の達成感や充実感、多大なコストとリスクと危機感を伴った作業の中にあり、常に失意や絶望と隣り合わせに存在しており、つまり「仕事」の中にしかないと書かれている。

しかしこの医学系雑誌には、寝食を忘れて研究に没頭すると「仕事」が「趣味」となり、仕事を「お金を稼ぐための営み」と考えると、そのレベルをはるかの超えたものは「趣味」という形容詞もあり、結局のところどう呼ぶかは別にして「極める」ことの大切さ、面白みを示していると思えるとコメントされていた。

冒頭、仕事が趣味と書いた私が県庁学校在校中、寝食を忘れ仕事に没頭したことは記憶にないが、仕事と称した釣りに関しては、釣り道具の購入、釣行費用、仕掛け、餌、釣り場、料理法等の情報収集、さらに実践に伴う詳細な記録・分析・反省等々、かなりのコストを費やした。また、釣って帰らねば家族の者に白い目で見られるというリスク？も常に背に重く押し掛かっていた。釣れなかった時の失意・絶望感はかなりのものであり、苦と感じたとき趣味は止めればよいが、仕事はそうはいかず、一

種の危機感を持つことが釣果アップにつながっていったのではないと思われる。

過去、釣りを極めたい？と寝食も忘れ36時間も釣りをしたこともあったが、このことで釣りのすべてを完全にマスターすることはできなかった。釣りを知らない人から見れば、単なる馬鹿に過ぎないのかも知れないが、同じ釣り場所でもその時の天候、潮、釣り方などにより条件は変化し、決してワンパターンでは通用しない奥の深いものがある。今後も「極める」ことを永遠の課題として、この仕事に専念したいと思っている。

しかし趣味の世界もまんざら悪くはない、手前味噌であるが、約20年前全国家畜保健衛生所業績発表会で優勝したことがある。当時、注射針の使いまわしによる牛白血病汚染が問題視されており、その感染予防対策をテーマとして、衛生的かつ効率よく予防注射等を行うためのグッズを女房の力を借り作成し発表した。

実はこのグッズのアイデアは夜釣りの仕事で電気ウキを眺めている時、ふと浮かんだもので、それを趣味の世界で応用しただけのものであった。村上龍はこの本の「企画の立て方」の欄で言っている。アイデアというのはふと浮かんでくることが多い、会議などで顔を突き合わせて考えても、良いアイデアが出てくることは少ない。「アイデアは組み合わせ」であって発見ではない。組み合わせのアイテム・素材には、記憶として蓄えられているデータと新たに入手・準備した外部資料があり、アイデアを生む発想力というのは、偏在する膨大な記憶力を徹底的に「検索」し、適したものを意識

岡山畜産便り 2010.02

の表面に浮かび上がらせる力ではないか。考えている間はアイデアは生まれてこず、脳が悲鳴を上げるまで考え抜いて、ふっとその課題から離れたときにアイデアの核が浮き上がってくるらしい。

私の場合、ふと浮かんでくるところは同じであるが、それ以外はあまり当てはまらないようである。業績発表会での優勝発表があった瞬間、応援のため同行してくれていた先輩が「晴天の霹靂」と叫んだ。まさにそのとおりの思ったが巨魚が釣れたのではなく、釣ってやったという思いもあった。

レベルの高い話として、平成21年3月(社)岡山県畜産協会から「蒜山酪農地域の形成」が出版され、著者である三秋尚先生がプレゼントしてくれた。

この本は、蒜山地域酪農の半世紀にわたる歴史、地域社会とともに発展する蒜山酪農の未来への道標を探し当てたいという三秋先生の並々ならぬ思いが、約500ページにわたり込められている。この本の背景には、昭和29年酪農振興法が公布され、翌年本県では初めて美作集約酪農地域が指定された。この中で蒜山地域を主体としてジャージー種牛地域が指定され、ジャージー種牛の導入に先だち啓蒙と技術指導のため、昭和29年県から専任酪農指導者として特別派遣された浅羽昌次、三秋尚両先生の日夜をとわず地域酪農家の巡回指導や三秋先生考案の急傾斜地における独特の段階耕方式による草地改良等を自ら実践された経験が原点になっていると思われる。

歴史を口伝えすることは簡単であるが、時としてその中には自分の主観・偏見が入り正確度から逸脱したものになりうる。それを先生自らの足で莫大な情報を収集・分

析され、本という形にされたということは、真実を後世に残したいという使命感・責任感を強く感じさせられる蒜山酪農のレベルを超えた日本の酪農の歴史書である。

これを村上龍の言う趣味の範疇にとどめるべきか？趣味は老人のためのものとあるが、先生は私より二周り上の大先輩であり、世に言う後期高齢者である。人生を捧げて打ち込む仕事のことをライフワークと呼ぶらしい。今回の三秋先生の業績はまさにライフワークそのものであるが、お金を稼ぐための営みではなく、そのレベルをはるかに超えたものである。先生のバイタリティーはどこから湧いてくるのか、ただただ頭の下がる思いであり、今後も仕事を趣味とされ、先生のご活躍を期待するばかりです。

最後に、今在ることがごく当たり前と思っている人は、歴史を知らない傾向があり、過去を振り返ることはあまりしないようです。「温故知新」という言葉が論語にありますが、時には原点に立ち返ることも重要であり、そのためには歴史を知る必要があります。そのことから「蒜山酪農の形成」は一読の価値があり、特に若い酪農後継者の方々に是非読んでもらいたいと思います。アイデアの元になる何かが落ちているかも知れません。